「論文作成の基本的心得について」(2012.10.12)
山内志朗(慶應義塾大学部文学部)

【論文の必要条件】
・1)問題意識、2)問題設定、3)論証・分析、4)結論

【論文と論文もどきを分ける微妙なライン】
・論文と論文もどきを見分けよ。偉い人(アインシュタイン、カントなど)の権威を用いたり、最新の海外の意見でも、他人の意見をそのまま借りてくるのはよいことではない。いくら立派な考えでも、他の人の考えであれば、評価は低い。自分で考えたものであれば、評価の対象になる。(良い考えを書いてあるのがよい論文ということではない)。
・他の人の考えを列挙したり、事実を記述しただけでは論文にならない。
・良い論文と「物知り」であることは異なる。調べたことを全部書いてはならない。
・どこかに書いていることをまとめても論文にはならない。(祖述は論文にあらず)。
・論文と「青年の主張」は異なる。積極的な提言や具体策を出せば良いというのではない。

【論文執筆のための心得】
・手先で書いてはならない。人間が文章を書いているうちは善い文章は書けない。文章そのものに書かせよう。(別の言い方すれば、事柄の必然性、物事の流れに沿って書くのが良い文章。ただし、天才は別)。
・準備が十分にすんで考えに考え抜いて、その後で書くと文章は自分で進んでいく。
・文章がある程度書けるようになるには、最低でも原稿用紙10000枚は書く必要がある。
・突飛な意見が求められているのではない。問題の姿が明晰に現れているものがよい。
・問題意識を鮮明にしておかなければならない。いろいろ書いてしまうというのが、初心者が陥りやすい悪い例の典型である。例えば、iPS細胞をめぐる問題でも、山中教授を讃えたいのか、iPS細胞によって倫理的問題が解消するということを言いたいのか、国の支援策が頼りないことを批判したいのか、論点を絞るべきだ。
・新聞や雑誌のように書いても、よい論文にはならない。新聞や雑誌は関連する情報を網羅的に記すのが目的である以上、論文とは目的が異なり、論文のモデルにはならない。
・盛りだくさん書いた方が良いわけではない。たくさん論点を書くと、加点法で点数がもらえると書いてある大学受験の小論文執筆法があるが、あれは大ウソである。ドンブリに入りきらない大盛りラーメンは歓迎されない。

【良い論文に結びつくかもしれない心得】
○良い論文を書こうと身構えてはならない。
(系)うまい文章を書こうと思うな。自分の文章がなかなかうまいなあ、と思うようになったら、進歩は止まる。
○(論文の枚数にもよるが)三〇秒以内で内容を要約できなければよい論文ではない。
○論文は明晰かつ判明でなければならない。
【明晰(clear)】
・何を論じようとしているのか明確に分かるものでなければならない。
→《何が論じられているのか、読んですぐ分かること》
【判明(distinct)】
・似ている他の事象から区別できる十分な基準を明示していること。
→《似ている問題とどこが違うのか尋ねられた場合に、その基準を言えること》
○起承転結や序破急という形式を守ることを書いてある論文執筆法があるが、あれはまったくのウソである。百害あって一利なし。
◎良い文章を思いつけるかは、最重要なことではない。名文家でも駄文は多い。重要なのは、良い文章と悪い文章を見極められること。そして自分に甘くならないで、文章を磨き上げられることだ。